

今から20年程前、家を新築する時私は、Sさんに初めて会った。彼は、鉄骨屋さんで屋根を固定する役目だった。工事は順調に進んだが、Sさんだけが来ない。予定日を、1ヶ月過ぎても来ない。「天気予報で、明日の夕方台風が来ると言っていた」と監督が慌てた。

屋根は、完全に固定されていないため、台風で飛ばされてしまうというのだ。

「何で今まで放っておいたの？」と聞くと、何度言っても、来てくれないとのこと。頭にきたので、夜電話して怒鳴ってやった。「明日、台風が来て!!屋根が飛ばされて、後ろの家にでも落ちて人が、死んだら、全部お前のせいだから!!」と言うと、「朝9時に行きます」とボソツと言った。

翌日、大型トラックに、部材を積んでやって来た。そして、周りの関係者の白い眼を、全く気にもしないで、直径25cm、高さ3mくらいの鉄製のポールを、何と一人で楽々と持ち上げて1本、1本水準器で、チェックして溶接し、固定していった。

あまりの速さに、まるで魔法でも見ているみたいだった。昼までに10本固定し、それを現場監督が、念入りに確認して私に言った。「完璧です」と。

それを聞いてSさんは、「台風が、来るまで4時間以上もありますよねガタガタ言われなくても、やる時は、やるのス!!」とボソツと言って帰って行った。ちよつとムツとした。

監督に支払いは、と聞くと今週中に払うと言った。「1ヶ月遅れたんだから、1ヶ月後に払ったら」と言うと、「そうしますか」と、悪戯っ子のように笑った

3ヶ月ほどで、家は完成した。Sさんのことを思い出し、監督に支払いを確認すると「1ヶ月しても2ヶ月しても何とも言ってこないの、こちらから支払いに行っちゃいましたよ」と、半ば呆れ顔をしてまた笑った。Sさんは、「わざわざ来てもらってすみません。丁度今行こうと思っていた所でした」と笑ったそうだ。今更ながら、呆れたが何か憎めない人だなと思った。

その後、インターロッキング、下水工事、フェンス、塀……様々な工事を頼んだ。いつもの事で、1ヶ月から2ヶ月遅れた。でも仕事は、完璧で工事費は相場の半額だっ

た。

ある時は、庭に放置してあるレンガを使ってバーベキューの炉を作ってくれた。

そして上部には、工事現場で余った丈夫なステンレスの部材を、切断してグリルとして設置してくれた。お金は、いらなうと言った。それどころか私が、「バーベキューやってみたい」と言うと言った次の日曜日に、大量の骨付きの肉と炭を買ってきて、火の熾し方から肉の焼き方、そして塩の振り方まですべて教えてくれた。

「昔、子ども会の世話役をやっていたいてこれをやると、子供たちが喜ぶのス!!」とボソツと言った。私は、料理が好きで何度かバーベキューらしきものをやったが、いつも生焼けで味も今一であった。ポイントは、一番火の入りにくい骨の面から焼いて骨が、キツネ色になったら、肉の面に塩をやや多めに振って、厚めのステーキを焼くように弱火でじっくりと焼いてゆく味付けは、安い何処にでもある塩のみスパイスも何も何も要らない。

最近、テレビで芸能人がうそ臭く目を丸くして絶叫する高級な塩は、御呼びではない。

余分な塩は、油と共に炭の上に落ち火となり、煙となり肉をゆっくりとローストしてゆく。

そして、表面はカリツとして中身はジューシーに仕上がる。

Sさん流のバーベキューは、世の中にこんな旨いものがあるのかと思うくらい旨かった。

子供の頃、父親が豚を飼っていて祭りの日に、一頭潰して皆に振舞ったのだそう。何度か出てくる地名が、ちょっと気になったので聞いてみた。

「丁度その頃、私の母もそこにいたはずだな」と。するとSさんは、「女先生が結婚することになって、壇上でお別れの挨拶をした時のことを、今でもハッキリ覚えています。女先生、とっても綺麗でした」とボソツと言った。じゃあ前から、私がその息子だと知っていたのかと嘖然とした。母にその話をするに「私は、低学年は受けもったことが無いので、その人のことは知らない」と言ったがとても綺麗だったという話に、頬を染めて喜んでいた。

70過ぎても女は、女だなと思った。

ある日、父が突然入院した。癌だった……。

身辺整理をしておこうと思ったのか、「誰かいい工事屋さんいないかな」と、弱々しい声で呟いた。家の塀を直したいらしい。咄嗟に、Sさんのことを思い出した。でも1、2ヶ月は遅れる、まずは相談をと思い現場を見せ、それから父の病状を説明し、病室に連れていった。Sさんは、父の言うことを事細かにメモした後、「1週間ください」とボソツと言い、そそくさと帰っていった。

父が「あの人、1人でやるのか？それも1週間で??」と狐に摘ままれたような顔ををした。

とても2ヶ月かかるかもしれないとは言えなかった。5日後の夜、Sさんから電話があった。終わったので見て欲しいとのこと私は、翌日カメラを持って実家に行った。またもや、完璧だった。何枚も写真を撮り、直ぐプリントして父に見せた。父は、凄く喜んだそして金額を聞いて、啞然とした。本当に良かったと思った。

祭日に、私の家で高校時代の友人数人と酒を飲んだ。そのなかの一人が、酒の勢いで行き成り切り出した。「LP3000枚貰ってくれないか？」と。私は、言葉を失った。彼は結婚して、マンションを買い家族で暮らしているが、レコードはがさばるため、実家に預けている。しかし妹の家族が母親と同居することになり、改築する為彼の部屋を占領しているレコードが、邪魔になったとの事。本当は自分のマンションに引き取りたいところだが、とてもそんなスペースは無い。このままでは、中学校の頃から買い集めたレコードがゴミとして捨てられてしまうと言うのだ。私が、「中古レコード屋に売ったら」と言うと、それもどうやら面白く無いらしい。勿論貰う訳には、いかない。仕方が無いから、私の家の地下収納庫に保管することにした。数日後、ダンボール箱10数個が運び込まれた。あまりの多さに、目の前が真白になった。すべてオリジナルサウンドトラックで、最高のコンディションだった。友人はレコードと言ったが、どさくさに紛れ、パンフレットもドツサリと運び込んだ。どのレコードを見ても、パンフレットを見ても、懐かしさが込み上げコンクリート剥き出しの味気ないガランとした空間は、青春の館に変貌した。

次の日、直ぐにSさんにレコードを収納する棚を、4段作って欲しいと電話するとその日の夜、来て寸法を採りその場で簡単な図面を書いて金額を言った。次の週から工事に入ると言ったが、それっきりになった。1ヶ月後電話をすると、今御祭りの準備でちよっと行けないと言う。祭りが終わった後電話した。今度は、後始末のため

ちよつと行けそうにないと言う。1ヶ月後、電話すると、消防の方で当分行けないと……。何だかんだで、半年以上待たされた後、やっと来て1段だけ取り付けた。その場で1段分の金額を支払うと、取り付け金具が、思ったより高かったので追加料金を要求した。私は半年以上待たされたことに、かなりムツとして「2段目からは、追加分は支払うが、1段目はこれで」と言った。彼はそれではと、あっさり引き下がった。その後1ヶ月経つても、工事に来なかった。また電話をすると、奥さんが主人は体を壊して入院していると言い、当分入院することになるかもしれないと付け加えた。次の休みの日、御見舞いに行った。ビックリする程痩せていた。「早く良くなって次の工事をしてくれないと困るよ」と言うと、すみませんと笑った。奥さんはニコニコしていたが、目は笑っていないかった。嫌な予感がした。

数週間後、新聞の慶弔欄にSさんの名前があった。あの時、追加料金を支払わなかった自分を責めた……。その夜、買い置きであった御見舞いに持っていったのと同じ桃缶を開けた。Sさんが食べたかどうかは分からないが、もし食べたのならこれが最後の桃缶かと思うと、様々な思いが重なって複雑な味がした。

斎場は入りきれない程の御祭り、消防関係者でこったがえしていた。香典の中に、追加料金も一緒に入れ、祭りの半纏を着、頭の上にちよこんと紫の布を乗せニッコリ笑ったSさんの遺影の前で、今までの感謝の気持ちを伝え、冥福を祈った。

ほんの少し気持ちが楽になった……。

逝く空が、眩しいくらいに青かった。